

「えっ、何!?!」

二時間目の授業中、英語のリスニング放送に市役所の同報無線が重なり、周囲がざわついた。後で、Jアラートと呼ばれる全国瞬時警報システムだったことがわかるが、令和二年七月三十日午前、関東・伊豆諸島・東海・東北・甲信・北陸地方の広い範囲に、緊急地震警報が発令された。教室にいた私達は、机の下に潜って緊張した数分間を過ごしたが、誤報だとわかって心の底からホッとした。

その日、学校からの帰り道、

(もしも、大地震が起きていたら・・・)

と、シミュレーションしながら私は歩いた。校舎を出て正面のグラウンドは、私達生徒の一時避難待機場所であり、状況によってはヘリポートにもなるかも知れない。その横にある体育館は、地域の人達の避難所に指定されている。校門を出て少し行くと国道一号線があり、必要な時には自衛隊の人達がこの国道を通って、きっと駆けつけてくれることだろう。

こうして考えてみると、普段何気なく使っている校舎やグラウンド・体育館、平常時には深く考えることもなかった道路や消防防災ヘリコプター、そして自衛隊と、私達の安全で安心できる社会生活の基盤は、物であれ人であれ税金によって支えられていることに、改めて気づかされる。

もしも、正しい納税が行われなかったとしたら、道路はボコボコのまま放置され、災害時に必要な備蓄も不足し、その輸送手段も整わない！なんて事態に陥ってしまうかも知れない。東日本大震災の時に実行できた、県境を越えて助け合うということが不可能になってしまったら・・・と、考えただけで辛くてならない。

「宮城の、あの光景は生涯忘れられない。」当時、災害派遣に幾度も出動した私の伯父が口にした言葉だ。震災後、被災地では避難所生活の住民の方の家や店で、空き巣被害が多発していたそうだ。そこで治安維持のため、宮城県内で活動したという。その時目にした多くの被災地は、まるで、がれき野原というほかにはなく、そこで暮らしていた人達を想像し、胸を締めつけられる思いだったという。

あの震災から九年。その間には、復興特別所得税という、被災地を長く支える味方もできた。税金とは、今在る私達の暮らしを守るだけでなく、これからの未来へとつなげていく、安心・安全の蓄えなのだと、私は考える。